

群馬県高等学校教育研究会音楽部会「平成28年度第2回授業研究会」

日 時	平成28年12月7日(水)
会 場	群馬県立高崎東高等学校
教科・科目	芸術科・音楽I
題 材 名	合唱 ～響き合う喜びを感じよう～
指 導 学 級	普通科 1年4組
授 業 者	稲毛 信哉 教諭

1 研究授業 指導案参照



2 授業研究

(1) 授業者より趣旨説明等(稲毛教諭)

他のクラスではやっていない、このクラス・授業での初めての取り組みであった。和音について意識させたいことや課題の量が多く、これまでの和音の知識の理解も身に付いていなかったように思う。もっと順序立てて準備すべきだった。

しかし、いつも以上にクラスの生徒は頑張っていて歌っていた。横のメロディー・ラインや歌詞から曲想を考えることはできていたため、縦の和音についてもグループワークでしっかりと考えさせたいという思いがあったが、どこまで考えられたかが問題である。評価も中途半端になってしまったが、関心・意欲・態度は見取れたのではないかと思う。その実際の生徒の興味・関心を見取る中で、自分が求めているものと生徒の実態との差が分かった。

楽譜が読める生徒は2割、書ける生徒は1割、クラスでは4、5人である。その把握をもう少ししっかりして、授業に生かしていきたい。ドラムを使ったリズム活動はよく取り組んでいたため、次の機能と声の授業にも繋げていきたい。

(2) 研究協議

① グループ協議

4グループに分かれる。下記「授業研究の視点」に沿い、グループ毎に協議を行う。その際、指摘だけにとどまらず「自分が授業者であったらどのように展開させていくか」も含めて考える。発表は協議後3分ずつ行う。

授業研究の視点

- ・本時の目標は達成できていたか
- ・課題の質やレベルは適切であったか
- ・評価規準の設定は適切であったか
- ・主体的・協働的に取り組む展開・内容となっていたか

②発表

<1班>勝山(万場)・柳田(館高特)・大小原(高高特)・諏訪(西邑楽)・黒岩(高高)・鈴木(桐南)

- ・「楽曲を構成する要素」をもう少し整理した方が目標の達成につながったように思う。合唱練習を通して、音楽を形づくっている要素を知覚するための働きかけ・投げかけがもう少し具体的であった方が、それらをしっかり知覚し働きを感受できたように思う。
- ・「こういう力をつけてもらいたい」というのがもっと明確である方がいいのでは。
- ・生徒がグループワークの後発表した際に、その答えの本質をもっと引き出してあげたり突っ込んであげたりしていたら、目標の達成につながったかも。生徒が他のグループの話の聞いていなかったところもあったので、「深まり」まで至らなかったのではないか。
- ・発問のしかた。発問の幅が広すぎて、生徒がわからないとすぐに教えてしまう、というスタイルだと深まっていけないような気がする。
- ・生徒を動かしてユニゾンを表現させたのは非常に良かった。
- ・もう少し落ち着いて考えないと、声部ごとの役割を考えるまでには至りにくいかもしれない。
- ・和音の構成音を考える際に、着目させた部分ではピアノ伴奏に長三和音の第5音がいつてしまっていたので考えにくかったように思う。合唱パートで3つの音が揃う部分で考えさせた方が良いかもしれない。またあの楽譜からいくつも音を拾って15カ所も和音を組み立てるのは大変なので、この曲の調の主和音くらい拾えばいいのでは。
- ・歌った際のハーモニーを歌いながら感じ取るのは、やはりなかなか難しい。
- ・課題の質とレベルを考えたい。楽譜から和音を拾わせる作業も、難しいものとそうでないものが混ざっていた。もともと調号でついているシのフラットなども拾わせるのはレベルが高いと思う。
- ・長三和音、短三和音などはどのように教えるか？（「聞いた感じでしか教えない」「特支の場合は、長三和音→晴れマーク、短三和音→雨マークなど。言葉とのマッチングが困難なため」「コンスタントに音を聴く練習をさせる」等の意見あり）
- ・和音を取り出して、どこで落とすか。
- ・和音の構成はすごく大切なものであるが、例えばユニゾンなどでも歌詞の意味と合わせて感じ取ることですごくメッセージ性が強まる例がある。今日の「和音」のことで歌詞の内容をリンクさせて深めさせることをしたい。転調する部分を歌詞とリンクさせることも面白い。
- ・そもそも合唱コンクールと音楽の授業との関わりが難しい。
- ・合唱曲と三和音を組み合わせる授業を作ることは非常に参考になった。また先生から生徒への自信を失わせない声掛けが良かった。
- ・楽譜から和音を取り出して書かせる際、ちゃんとト音記号から書かせた方がいいかも。

- ・最後に向かってどんどん響きが良くなっていった。
- ・もっとピアノを活用した方が良かった。
- ・今回のような授業であれば、机をどかしてしまった方が良かったかもしれない。
- ・グルーピングの人数が難しい。
- ・学校が変わると実態が変わるので、やはり生徒の実態に合わせた指導が大切。

<2班>伴野(太田東)・斎藤(沼女)・藤嶋(関学大附)・坂本(長野原)・松平(尾瀬)

北爪(太田高特)

- ・身体でリズムを表現していたのが良かった。
- ・グループでの人数が多く、生徒は発言が思うようにしにくかったのではないかと思う。
- ・ワークシートに取り組んだ前後での生徒の和音の感じ方が変容していた。
- ・先生が生徒に励ましの言葉を多くかけており、良い雰囲気だった。
- ・生徒自身がよく考えられていた。
- ・歌いながら活動できれば良かった。
- ・曲の「決めどころ」を生徒に気付かせる→和音の必要性がわかる。
- ・体現したものを楽譜に落とし込む作業が必要。
- ・クラスごとに実状に差があると難しいように思う。生徒の中で教え合いができていたのは非常に良かった。
- ・分析させる和音の選定に気をつける(歌パートに三音ある方が良い)。
- ・実際に生徒が3つの音を歌ってみてから、和音を判断しても良いかもしれない。
- ・教室の使い方は工夫が出来る。
- ・発声をもう少しやってもいいのでは。
- ・授業の雰囲気が良かった。
- ・生徒自身の言葉がもう少し出ると良い。
- ・授業が終わった後も歌っている生徒がいてとても楽しんでいる様子が伝わってきた。

※和音をどのように感じさせるか、「ハモる」ことの各校の取り組みについて

- ・ハモることに抵抗を感じる生徒がいるため難しい。男子はそもそも音程をとることが難しい。
- ・好きな曲でやると入りやすい。
- ・簡単なカデンツァのようなものを使う。
- ・日頃の訓練は大切である。
- ・和音について、例えば同じ音で構成されている和音でも、転回形になっていることで雰囲気が変わったりするので、その異なりを知覚させたい。
- ・グループでやった方がいいのか、全体でやった方が良いのか。

<3班>小川(利根商)・饗庭(市立太田)・武井(伊商)・力石(伊高)

- ・グループ活動を Sop/Alt/男声のパートに分けて行うのではなく、それぞれのグループにその3パートの人間が皆いる上で行われていたのが良かった。
- ・ユニゾンに気付かせる際の発問に対して、「音の形が一緒」「歌詞が一緒」という的確な意見があったため、考えるべきではないか。
- ・生徒同士のやりとりがもっと多いと良かった。グループをもっと小さくしても良かったかも。少人数すぎると歌って試す活動の際にあまり歌えないことも懸念されるが、逆に

一人ひとりが自覚を持って声を出すかも知れない。

- ・協働的に学ぶ「目的」を、生徒があまりわかってなかったかもしれない。
- ・ユニゾンとハーモニーの違いを動きで感じたのは良いが、「音」でも感じられると良い。
- ・ユニゾンとハーモニーについて理解を深める過程において、「特徴は何？」という問いかけが唐突に出てきてしまったので生徒に戸惑いがあったか。
- ・ユニゾンを身体で表現→ユニゾンを「音」で上手に練習する→ハーモニーと比較して違いを感じ取る、というプロセスが良かったのではないか。
- ・導入のしかた。最初にせつかく校歌を歌っているの、校歌でユニゾンとハーモニーの違いに気付かせた上で、授業の主教材のユニゾンをどう歌うか等を考えさせてみるのはどうか。
- ・生徒の『リズム』で強調している」等の良い発言を生かすると良かった。
- ・ハーモニーの進行を音で確認し、和音のみを「ma」で歌うなどすると、感じ取りやすいかもしれない。

(3) 指導・助言等

①荻野指導主事

あたたかい雰囲気です授業が進められていた。生徒の主体性を見取る努力がなされ、先生の思いがあふれていた授業であった。また、生徒が安心して活動に取り組むことができおり、これも、日頃から先生と生徒とが積み重ねてきた成果であると感じた。しかし先生が伝えたいことが多いため、どうしても説明中心となってしまったことから、本時のねらいや生徒の実態を踏まえつつ、内容を精選することで生徒の思考がより活発になるのではないかとと思われる。

授業中の発問で、生徒から非常に多くの言葉が引き出されていた。この、生徒の中から出てくる多彩な言葉を拾いあげ、グループやクラスで共有し、次の活動につなげていくことで、更に授業がふくらむと考えられる。また、ワークシート等を活用して表現を視覚的にとらえたり、共有したりする活動なども有効であり、生徒の主体性や充実感にもつながっていくと思われる。

グループ活動では、指揮をしながらグループの表現をまとめる生徒が見られるなど、様々な活動が自然に行われていた。ペアワークやグループワーク等の取り入れ方は色々あるが、そのねらいに合わせて活動を考え、取り入れていく必要がある。そして、その土台を支えるものは、生徒の実態に基づき見通しをもって計画を立てることであるが、本授業で生徒の状況に応じて臨機応変に対応する場面が見られたことは、生徒の活動において有効であった。

生徒は自分たちの歌声がどのように変わったか気になっていた様子であり、自分たちの演奏を録音し、聴き合う活動まで実施できなかったことは残念であった。ねらいに基づいて生徒自身が振り返りを行い、自分たちの思いを表現に繋げられるようにする活動は重要な授業の要素である。授業後に、歌いながら音楽室を後にする生徒が多く見られたことが印象的であり、この生徒の主体的な学びの状況を授業に取り入れていただきたい。

これから迎えるであろう激しい社会の変化の中にあっても、何が重要かを主体的に判断したり、自分の考えを根拠をもって相手に伝えたり、いろいろな人と協働していくこと

や、課題を発見し、解決につなげていく取組などが求められている。これらを教科でいかに取り入れていくかを考えながら、それぞれの学校の実態に合わせて工夫していくことが大切である。

アクティブ・ラーニングの視点、すなわち、「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善を考えていただきたい。生徒の主体的な学びにつながるような課題の工夫が次の学びに繋がり、授業が変わる。生徒自身がいろいろ考え、協働しながら取り組める課題、自分のこととして捉えられる課題を精選していくことで思考が深まっていくという過程がポイントである。今後も、授業を通して生徒自身が気づき、考え、表現する時間を大切にしていきたい。

②清水副部長

グランドピアノのカバーの破損が真っ先に目についた。環境を整える工夫をしてほしい。学習指導案を見ると歌う場面が多いのかと思っていたが少なく、歌唱というより楽典の授業である印象を受けた。それで良かったのかどうかを考えてほしい。

校歌の伴奏はCDではなくピアノ伴奏の方が良いかもしれない。男子の声がしっかり出ていて良かった。普段からの生徒指導が行き届いていると感じる。

「夢みたものは」歌唱の際、指揮を振る生徒の指導は事前にしておけると良かった。また音楽の授業での「せーの」は音楽的でないため、「3・4」等のカウントが良いのではないか。表情を観察していたのは良かった。女子が「のど痛い」と言っていたのを拾い上げてあげられると良かった。お腹に力を入れて、と指導していたが、入れるとどうなるのか生徒はわかっていたのか疑問である。また「ちょっと」が口癖として多いのが気になった。

ユニゾン、ハーモニーの学習について。授業8時間目でユニゾンの学習をしているが、中学でもユニゾンについては学習しているはずなので、もう少し前で扱ってもよかったのではないかと思う。時間も長かった。

指導案には「グループを細分化して」と記してあるが、実際にはグループが大きかったように思う。いかに少ない言葉かけで生徒を思うように動かすかが大切。説明は短く、生徒の活動は多くなる形が理想である。

楽譜が読めない・書けない生徒が多いという実態がある中で、長三和音を黒板に書くことに違和感を覚えた。またグループ作成の際、途中から男女混合の座席を指示していたが、前もって男女混合で指示ができると良かった。

最後の合唱で、男子の音が下がってきたということを指示したのであれば、そこで音をとめて確認した方がよかったのでは。フレーズも切れていたところもあり、最初は指示していたが、後半でも最後まで飛ばせるように意識付けできるとよい。生徒の声が聴きたいので、手拍子もない方がよい。生徒の振り返りの時間をもう少しとってほしい。そうすると次に繋がっていく。

素直な生徒と出会って、すごく可能性を感じる授業だった。

③廣澤副部長

高校改革や統廃合、学級減が進むと音楽教員の足場が揺らいでいく。群馬県でも常勤の

音楽の教員がこれから減るのではないかという懸念がある。自分の職を失わない努力をしてほしい。合唱コンクールをやろうという声が上がったのは常勤の音楽の先生が必要とされている証。生徒指導的にも意味があるため、そういったことを大切にしていってほしい。

学習環境としての音楽室についてしっかりと考えると、生徒の活動を深化させていくことができる。ICTをうまく活用できるとよい。例えば「ユニゾン」の生徒の動きについては、映像を使ってマーチングなどを見せると、生徒からの意見として「力強さ」が出てくるのではないか。4人で一緒に動く力強いだろう？という誘導尋問はよくない。視聴覚教材の工夫をし、いろいろなものを多角的に取り入れてほしい。

研究授業にあたっては、まず研究テーマをしっかりと持つことが大切である。今回は「和音構成を理解することが合唱表現に有効であったか」ということだとは思いますが、学習指導案からはすぐには読み取れなかった。研究授業は、研究テーマがありきである。仮説を立てて、それが本当に生徒に有効であったかを見る必要がある。授業での成功は3割程度であり、7割は失敗している。失敗を繰り返さないために新たな仮説を考えていくのである。

今日の授業を見て、ここはこのほうがいいのではないかと欠点を口にするのは簡単なことであるが、今日参加した先生方は、自分で自分のところの生徒だったらどうするかをしっかりと考える。自分の中での仮説をしっかりと立てて、自分で実践してほしい。大事なことは失敗の積み重ねである。上手くいったことをこうした授業研究会などで発表するようにしてほしい。

また年間指導計画をしっかりと組み立ててほしい。和音構成がしっかりと理解できたところで表現に生かす工夫が必要。楽典の知識と今回の取り組みがすれ違ってしまっている印象を受けた。ここまでにこの能力を身に付けさせたいという指針をしっかりと示し、生徒たちの満足感、達成感にもつなげてほしい。

④上田音楽部会長

点呼を取りながら一人ひとりの表情を見るということであれば、健康観察の一環でピアノ伴奏だけではなくCDで行ってもよい場合もあると感じた。校歌を元気よく歌えることは、教職員にも元気を与えてくれる。

力強いユニゾンが、セットでの同時の動きによるものだという事に気付けたことがよかった。成長し続けようと思っていることが大切だと思う。

※稲毛教諭より補足説明

点呼と校歌CDで歌わせて机間巡視というのは、生徒指導の観点からも行っている。最初はほとんど挨拶もできなかったため。でもこれからはもうワンステップ先にいけると思うので、是非ピアノ伴奏での歌唱にチャレンジしたい。

3 協議

協議テーマ：「学習指導要領の改訂に向けたより一層の授業改善」

(1) アクティブ・ラーニングの視点に立った授業の推進

(ステップアップサポート推進研究員による実践報告)

(発表者) 群馬県立館林女子高等学校 島田 聡 教諭

○はじめに

(例) 火曜日+水曜日=金曜日 $2 + 3 = 5$

曜日を足せるものであると仮定し、月曜日を「1」とすると答えに辿り着く。

(問題) 月曜日+木曜日=? (答え) 金曜日 (例) を踏まえて解答できる。

☆参加者の活動

上記のような問題を、1分間でより多く計算する。

計算後、より多く答えるためにはどのように計算したか、その方法を周り話し合い、考え方を共有する。

(考え方の例) 日曜日は「0」、または足さない、月曜日はその曜日の次の日・・・というように考えると速く計算できる。これが、「学びが深まる」という経験である。

(問題) $M + B = ?$ (答え) 0

答えは「0」でよいという確認が普通にできるのは、先ほどの前提や経験があるからである。「 $1 \ 3 + 2 = 1 \ 5$ 」として答えられる。またBは「2」であるから、Mの次の次を答えればよいという経験値も蓄積されている。今まで学んだことから次の新たな学びが生まれる、これがアクティブ・ラーニングの目指していることの一つではないかと思う。

「学力をどう捉えるか?」ということについて、一つの例を紹介したい。アクティブ・ラーニングで育成すべき資質・能力の3つの柱を車に例えると、「主体的に学習に取り組む態度」を中心として「知識・技能」と「思考力等」を車の両輪として捉えることができる。取り組みたくなるような課題、一人では取り組めないが誰かと一緒に共有して取り組めば解決できる課題を考えることが必要である。

○アクティブ・ラーニングとは何か?

アクティブ・ラーニングとは、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」「主体的・対話的で深い学び」と文科省の教育課程企画特別部会では定義されている。

しかし、国立教育政策研究所の白水始氏が示している、「子供一人ひとりが『自分で答えをつくる学び方』のことであり、『学んだことが次の問いを生み出す学び方』のこと」という定義が非常に分かりやすく感じる。また、「考えるための『教材』を教える行為は『アクティブ・ラーニング』を妨げるものではない」ということも、本日の研究授業の内容にも関わることであると考える。その上で建設的な学び合いが発生する。

○実践報告 (鑑賞領域の題材)

テーマとして「音楽を聴き、その特徴を手がかりに、ラヴェルの作品を探そう!」ということを設定した。テーマを示すことで音楽を聴く必然性が出てくる。

最初にその作曲家の作風とニックネームの関係性を伝え、鑑賞して考えるための「材料」を先に提示する。批評文も予め用意しておき、それを基に楽譜にA~Cまでの印を付ける活

を踏まえた授業改善のための教材研究”として、以下のワークシートを活用しながら教材研究を行った。

それぞれの教材・楽曲について、特徴を「音楽を形づくっている要素」を手掛かりに分析し、その教材・楽曲によって生徒の何を育てるか、生徒にどんな力を身に付けさせるかを焦点化していく。音楽科教員が複数集まることが出来る機会ということで、はじめに個人で教科書から教材を選曲・分析し、その後使用教科書ごとにグループを作り、意見交換を行った。

今回は楽曲の分析を行うところまでで時間切れとなってしまったが、今回の教材研究をきっかけとして、現在教材として扱っている楽曲や新しい教科書に掲載された楽曲を研究し、授業改善や次年度の年間指導計画の立案に生かせる良い機会となった。

各グループのまとめ

教材	魅力・伝えたい内容	指導事項	音楽を形づくっている要素								
			音色	リズム	速度	旋律	テクニク	強弱	形式	構成	
Caro mio ben	・ゆっくりなので、伊語の発音がしやすい ・長いフレーズの練習になる ・下降系の順次進行で、発声の勉強になる 等々、魅力のある教材である	歌唱アウ 鑑賞ア	・声の音色 ・ピアノの音色 ・西洋的発声	・4の4拍子 ・弱起 ・フェルマータ	・Larghetto ♩=60 ・rit./a tempo /フェルマータ ・フレーズに沿った rubato	・長いフレーズ ・ホルタメント・装飾音 ・下降音型、順次進行 ・減5度 ・D-dur ・転調(E-dur/A-dur)	・Aはモ/フォニー的 ・AとBの伴奏は対照的 Cはミックス (Aは旋律をなぞっており、 Bは和音の動き)	p f ppp mf piu.cresc. クレッシェンド デクレッシェンド	ABA' C	反復する リズム	
O sole mio	・軽易度が高校生にあっている ・伴奏のリズムの面白さ ・明るい曲想や、声の音色の明るさや響き ・速度、強弱を自分で変化させる表現の工夫の美しさを 味わうことが出来る 一握りを持って考える材料がたくさん ある(歌詞、楽曲の背景等) ・前半と後半の歌い方の違いを工夫する	歌唱アイ	イタリア語の発音、 発声の違いによって 生まれる声の音色	伴奏のハバネラの リズム	緩急	装飾音			歌詞と関連付けた 強弱変化		
L.v.Beethoven 交響曲第9番	・曲想に変化に富んでいて魅力があり、構成がわかりやすい ・合唱付きの交響曲である ・この詩で音楽を作りたい ・日本で年末に演奏される機会が多い、ベートーヴェンに とっての最後の交響曲である、など文化的背景 ・歌唱の、ソロと合唱の表現上の効果がわかりやすい ・テレビなどで耳にする名曲である	歌唱アウ 鑑賞ア	・声の音色 ・合唱の響き ・オーケストラの音色 ・チェロ・コントラバスの 音色から歌声への 関わり			チェロの抑揚の付け方と 歌い方 (レチタティーヴォの部分)	・合唱としての 各声部の関わり ・オーケストラと歌の 関わり ・歌詞と音の 組み合わせ方		ソナタ 形式	1~3楽章の 主題が4楽章に バッチワークの ように入っている	
翼をください	・構成がわかりやすい 誰しも知っている ・歌詞の内容が明るく希望がある ・歌唱の導入として扱いやすい	歌唱アイウ 鑑賞ア	声の音色 (原曲、合唱など)	・三連符 ・4ビートと8ビート					サビに向けての クレッシェンド	有節 歌曲	AA' BB'

4 参加者 (敬称略 順不同)

上田 裕信 (太田東)	廣澤 秀伸 (藤岡特支)	清水 郁代 (二葉特支)
清田 和泉 (吾妻特支)	荻野 葉子 (高校教育課)	東 喜峰 (前橋)
黒岩 伸枝 (高崎)	島田 聡 (館林女子)	伴野 和章 (太田東)
饗庭 麻里 (市立太田)	坂本 将 (長野原・嬭恋)	井上 春美 (藤岡中央)
鈴木香奈子 (桐生南)	小川 唯佳 (利根商業)	稲毛 信哉 (高崎東)
諏訪 幸男 (西邑楽)	大小原美幸 (高高特支)	松平 康子 (尾瀬)
斎藤真理奈 (沼田女子)	藤嶋 啓子 (関東学園大附)	勝山 英城 (万場)
北爪 優香 (太田特支)	武井 康博 (伊勢崎商業)	力石 泉 (伊勢崎)
柳田絵美子 (館林特支)		

文責：鈴木香奈子 (桐生南)
坂本 将 (長野原・嬭恋)
饗庭 麻里 (市立太田)